

# いしがきに響く音楽が 特集 盛岡というまちの記憶に!



今年も盛岡城跡公園をメイン会場に熱く盛りあがった、「いしがきミュージックフェスティバル」。10回目を迎え、県内外からおよそ8万人を呼び込むイベントに成長しています。まちなかに賑わいを生む起爆剤といえる音楽フェス。その運営に関わる黒沼亮介さんに運営サイドの思いをお聞きました。

## 記念事業としてスタート

まだ夏の余韻が残る9月18日、盛岡城跡公園に「音楽」という一つのコンテンツで繋がった多くの人々が集いました。同会場を含む市内中心部10カ所で行われた「いしがきミュージックフェスティバル」。まちなかで開催される音楽フェスは全国でも珍しく、来場者は右肩あがりが増えていきます。

そのはじめは、2006年の「盛岡城いしがき文化祭」。中心市街地活性化を目的にした岩手公園開園100周年の記念イベントであり、音楽、まち歩き、アートなど幅広いジャンルの文化活動が繰り広げられました。そして、翌2007年から音楽に特化してスタートしたのが「いしがきミュージックフェスティバル」です。

## 「まちを元気に」、 単純な思いがきっかけ

運営にあたっては、盛岡市、地元テレビ局やラジオ局、新聞社等のメディアを中心に実行委員会を設立。イベントの企画や運営は、市内のライブハウス「盛岡クラブチェンジ」が担っています。毎年、幅広いジャンルのプロミュージシャンをゲストに招くと共に、一般応募で選ばれた数多くのアマチュアミュージシャンが登場。全ステージ入場無料という大胆な企画で継続してきました。野外音楽フェスといえど山や海での開催が多い中、中心市街地でプロとアマチュアが同じ舞台上

演奏し、誰もが自由に音楽と触れ合える。それは同イベントならではの特長といえるでしょう。開催当初から運営を担ってきた「盛岡クラブチェンジ」の代表、黒沼亮介さん（同フェスティバル運営副委員長）は、はじまりの経緯をこう話します。

「盛岡で生まれ育った自分にとって、昔はまちがもつと元気だったという記憶があつて。同じような思いを抱いていた仲間たちと話すうち、『じゃあ、まちなかを元気にできるようなイベントをやろう』とはじめたのが『盛岡城いしがき文化祭』です。ちょうど盛岡でも大型商業施設の建設が相次ぎ、人が郊外へと流れはじめた頃。中心市街地で何をやって人も人を呼び戻すのは難しいと言われた時期でした。」

2007年の初開催から2年間は、ゲストアーティストのステージが有料でしたが、音楽好きに限らず子ども達やおじいちゃんおばあちゃんも含めて、まちなかを行き交う人皆に足を運んでほしいと、2009年からは完



若い世代が「地元に戻ったら何かできそう」と思える、そんなきっかけになればいいと黒沼さん

全無料の音楽フェスティバルに。現在までそのスタイルを継続しています。

## 誰もが立ち寄れるフェス

開催当初は、プロとアマチュアを合わせて50〜60組ほどの出演規模でしたが、今や出演者は100組を優に超えステージエリアも拡大。運営経費は概ね3000万円を要します。運営資金の大半は企業協賛によるものですが、昨年は目標金額まで届かず資金の一部をクラウドファンディングによって集めました。結果を見れば、同イベントに対する来場者の期待を示すべく600万円を超える支援が集まったのだとか。



同イベントは中高生や大学生がステージに立てる貴重なチャンス

「出演者の一般応募は中高生から70代のシニアまで実に幅広く、400組を超えています。審査は大変ですが、アイドルも伝統芸能もいろんなジャンルのだとか。子ども達が音楽に触れあう様子、まちが賑やかでいいねえ」とにこやかに話すお年寄り、かつてフェスに出演した中学生がその後東京でプロデビューした姿を知ると良かったと思えるし、やり続ける意味があるのかなあと、黒沼さんは笑います。

ヤンルを織りませたコンテンツにしています。自分自身がライブハウスをやっているし、ミュージックフェスという名称から単なる音楽イベントと思われるかもしれませんが、このイベントは中心市街地活性化を目的にしたもの。一般市民や県民が演者として参加したり、気軽に見に来てもらうことがメインコンセプトです。そのコンセプトがぶれていないことが10年間継続できた理由かもしれません」と黒沼さん。

企画から協賛金集め、インフラ整備や安全管理など、規模を拡大しながら継続することは決して楽なことではありませぬ。それでも続けていくのはどうしてでしょうか。

子ども達が音楽に触れあう様子、「まちが賑やかでいいねえ」とにこやかに話すお年寄り、かつてフェスに出演した中学生がその後東京でプロデビューした姿を知ると良かったと思えるし、やり続ける意味があるのかなあと、黒沼さんは笑います。「子ども達もそうだし、おじいちゃんやおばあちゃんも、何か記憶に残るようなイベントにしたくて。例えば、無料であるがゆえに小学生も何気なく立ち寄って、『音楽もいいな』『あのステージに立ってみたい』と思ったり、音楽に限らず『何かできんじやないのかな』と思ってくれるとか。音楽は、来た人の心にまちの記憶をつくる装置みたいなものです。」

## 続けるための検証

そして10年という節目を迎えた今、運営委員会では盛岡というまちのキヤパシティを改めて把握するための市場調査をしています。年々増える来場者にする安全性確保や満足度向上に向けてどんな対策をとればいいのか、イベントの方向性を考えるための情報整理といえます。

「イベント自体はいい景色になっていますが、やはり一つの記憶でしかない。それがまちにフィードバックしていなければならないし、各市町村と連携しているんなイベントとドッキングしていきたい」と黒沼さん。今年度は「希望郷いわて団体」によるスペシャルステージもありましたが、主催者が規模を拡大するだけでなく地元事業者に



着町ステージは商店街青年部の働きかけによる自主参加



10年を節目に、より魅力あるイベントへ!



若者たちでにぎわう大通り

よる自主的コラボも歓迎とのことです。たった1日で約8万人を動員する「いしがきミュージックフェスティバル」。その8万人の心に盛岡というまちがどう記憶され、音楽をきっかけにどう賑わっていくのか。来年への楽しみは広がります。